

魂の歷程(6)

—Bonaventura, *Itinerarium mentis in Deum*

第6章 翻訳と註解——

長倉久子

ボナヴェントゥラは、『精神の神への歷程』(*Itinerarium mentis in Deum*)において、我々の神の観想の場を、外的世界から内的世界へ、そして、これらを超越する神そのものへと導いてきた。つまり、第1章及び第2章において、人間にとって外的世界である可感的世界をいわば神の痕跡として、この世界を通してこの世界の創造主なる神の力と知恵と善性を観想し、更にこの世界のうちに、神が本質と力と現存によってそこに存在していることを考察し、続いて第3章及び第4章において、内的世界つまり自己の精神をいわば神の似像として、この精神の自然本性のうちに見出される三一構造を通して神の三位一体性を考察し、更に恩恵によって修復され刷新された精神のうちに神的愛と賜物によって住まう神を観想した。そして、第5章及び第6章においては、神の名称を通して神を観照している。つまり、第5章では旧約聖書に記された神の名の啓示(「私は〈私は在る〉という者である」『出エジプト記』3章14節)に基づいて、「存在そのもの」である神を考察し、この「存在そのもの」という神の第一義的名称から導き出される諸々の神の本質的属性を考察し、一なる神の本質を観照した(『南山神学』第5号, 1982; 第7号, 1984; 第8号, 1985; 第9号, 1986; 第11号, 1988参照)。そして本章においては、偽ディオニュシオスに従って新約聖書に記された神の名の啓示(「神お一人を除いて善き者はない」『ルカ福音書』18章19節)に基づいて、「善きもの」という名称を通して三位一体の神の考察を試みている。

ところでボナヴェントゥラは、神の観想の六つの段階を象徴的に表現し

ようとして、聖書に（またフランシスコの生涯に）多くの事跡を求めたが（序文第2，3節，第1章3，5，9節，第3章1節，第4章7節，第5章1節参照），この第6章では，第3章1節を承けた第5章1節に引き続き，幕屋の象徴を用いている。つまり神の観照は，神殿の前庭（感性界を通して，また感性界において神を観照する）から始まり（第1・2節），聖所（人間精神を通して，また人間精神において神を観照する）に入り（第3・4節），至聖所なる幕屋（神の名称そのものを通し，またその名称において神を観照する）に至った（第5・6章）。ところで幕屋の前には一対の智天使（ケルビム）の像を置くよう命じられているゆえ，ボナヴェントゥラは，神の名称の二つ（「在ること」と「善きもの」）を巡る観照を二つの智天使になぞらえている。

この第6章は随処に偽ディオニュシオスやアンセルムスを想起させる内容や用語法が見られるが，それはボナヴェントゥラが彼らの著作に日頃から慣れ親しみ，内容や用語法が血となり肉となっていたことを伺わせる。ところで，ここには第5章に引き続き，ボナヴェントゥラの好んで用いる反対の一致（*coincidentia oppositorum*）という手法が不断に見い出される¹⁾。三位一体の秘義の象りを表現する為に彼が用いる三語一組の手法とあいまって，三にして一なる神の秘義と神人キリストの秘義の不可思議（第3節参照）を表わす為に用いるパラドクシカルな二語の組み合わせ（必ずしも常に反対対立する語の組み合わせではないが）の手法は，文章にリズムを与え，修辭的で雄弁なものにしている。

第 六 章

至福なる三位一体をその〈善なるもの〉という名称において観照することについて。

- 1 （神の）本質的諸属性を考察した後は，覚知の眼を上げて至聖なる

三位一体を観るよう努めねばならない。それは第二の智天使（ケルビム）を第一の智天使と並べて置くためである⁽¹⁾。ところで、本質的諸属性を観るにあたって「存在」そのものがその根源でありまた名称であって⁽²⁾、それを通して他の諸属性が知られてくるように、諸々の流出⁽³⁾を觀想⁽⁴⁾するにあたっては、「善なるもの」そのものが最も主要なる基^{もと}である。

2. ですから、注意してよく御覧なさい。最善なるものは、端的に、それ以上によりよいものは何も考えられないところのものなのです。そして、かかるものは、存在しないとは、正当な仕方では考えられないようなものなのです。というのは、存在することは存在しないことよりも絶対によりよいからです⁽⁵⁾。そしてかかるものが正しい仕方では考えられるのは、ただ、三にして一なるものと考えられる場合以外にはありません。というのも、「善は自らを普く分ち与えると言われる」⁽⁶⁾のであり、それ故に、最高に善なるものは、最高度に自らを分ち与えるからです。しかし最高度に分ち与えることができるのは、それが現実的にして内的であり、実体的にして位格的であり、自然本性的にして意志的であり、自由にして必然的であり、欠けることなく完全である場合に限られます。従って、最高に善きもののうちに、永遠という仕方では、現実的にして実体的に同一の産出が、そして、尊さにおいて同等のペルソナの産出があるのでないならば一かかる産出は、産みと息吹きという仕方では産出する者があり、かくて永遠の始源とともに永遠に始源である者が産み出され、以て愛される者と（愛する者と愛される者の両者に）共に愛される者、産み出される者と息吹かれる者が、産み出されることとなりますが、これこそ父と子と聖霊なのです⁽⁷⁾—決して最善のものではないでありましょう。なぜなら、それは最高度に自らを拡散し分ち与えることがないでしょうから。というのも、被造界にみられる時間的拡散は、永遠なる善の廣大無辺さ⁽⁸⁾に比べるならば、中心に止まっていて点のようなものにすぎないのであり、そこからしてまた、かかる拡散よりもより偉大な何らかの拡散が、つまり、そこでは拡散する者が他者に全実体と本性とを伝え共に分ち合うという拡散が、考えられうるか

らです。そして、結局、もし現実にてあれ思考においてであれ、かかる(偉大な)拡散がないということも可能であれば、それは最善なる者ではないことになりましょうから。

ですから、もしあなたが精神の眼によって善性の純粹さを注意を傾けてしかと観る⁽⁹⁾ ことができるならば、そしてこの善性は、無償にしてしかも(愛し)返すべき、そしてこの兩者(無償であることと返すべきであること)の混じり合った愛をもって、無我的に(caritative)愛している者たる始源の純粹現実態であり、また、自然本性にして意志という仕方、最高度に十全に注ぎ分ち合うものであること、また、この注ぎ分ち合うことは、御言と賜物という仕方で行われ、御言において一切が語られ、賜物において他の一切の賜物が贈られるということをしかと観ることができるならば、善の最高度の自己伝達の能力によって、父と子と聖霊の三位一体が必然的に存在するというを、貴方は見る⁽¹⁰⁾ ことができます。父と子と聖霊のうちには、最高度の善性のゆえに最高度の自己伝達の能力が必然的に存在しなければなりません。また最高度の自己伝達の能力のゆえに、実体を最高度に同じくするのでなければなりません。実体を最高度に同じくすることからして、最高度に互いに類似しているということがなければなりません。そして、こうしたことからして最高度に同等であることが、またこれによって最高度に共に永遠であることが、そして、また以上に述べられた全てのことからして、最高度に互いに同じ親密さをもっているということがなければなりません。そしてこの親密さによって、一ペルソナが、最高度の相互浸透によって必然的に他のペルソナのうちに在り、一ペルソナが他のペルソナと共に、至福なる三位一体そのものの実体も能力も働きも全く分かつことなき仕方働くのです。

3. ところで、これらのことを観想する際には、暮々も、理解不可能な事柄を理解していると考えることのないよう気をつけて下さい。というのも、まだこれら六つの在り様⁽¹¹⁾ について考察すべきことがあり、それは、激烈な仕方我々の精神の眼に衝撃を与え、感嘆のあまり茫然自失させること

なのです。つまり、そこでは、最高の分ち合いがペルソナ夫々の固有性と
 ともにあり、実体として最高度に同一であるがヒュポスタシス⁽¹²⁾として
 は複数であり、最高度に類似していてもペルソナとして別々であり、最高
 度に同等であっても秩序があり、最高度に同じ永遠性を共有しながら流出
 があり、最高度に内奥を分ち合いながら送り出しているのです。かかる様々
 な驚くべき光景を前にして、いったい誰が起ち上って感嘆しないというこ
 とがあるのでしょうか。——ところで、これらのこと全てが確実に至福なる
 三位一体のうちにあるということは、もし我々が眼を上げて全てを超えて
 最も卓越した善性を見るならば、理解されるのです。すなわち、もしそ
 こに最高の分ち合いと真の溢れ広がりがあるならば、そこには真の源があり
 真の区別があるのです。そして、全部が分ち合われるのであって一部で
 はないのですから、所有されているものそのものが、しかも全部が与えら
 れるのです。従って、流れ出る者と産み出す者が、諸々の固有性によって
 区別されながらしかも本質的に一なのです。更にその結果、諸々の固有な
 特質によって区別されるが故に、ペルソナに固有な諸々の特質があり、ヒュ
 ポタシスとして複数であり、源の流出があり、前後という順序ではなく源
 という秩序関係があり、送り出してもそれは場所を変えるものではなくむ
 しろ無償の息吹きであり、産み出す者が送り手として送られる者に対して
 有つ權威によって行われるのです。——ところで、三つのペルソナが実体
 的に一なのですから、本質においても形相においても、尊さにおいても永
 遠性においても、実存においてもそして限られえないことにおいても一で
 あることがなければならぬのです。——従って、これらのことをそれ自
 体で一つ一つ考察している間に、貴方は真理を観想する手だてを得ます。
 これらを互いに比べている間に、賛嘆の極みにひき上げられる道を得ます。
 ですから、貴方の精神が賛嘆によって感嘆すべき観想に上り行くために、
 これらのことを同時に考察するべきです。

4. それというのも、『出エジプト記』⁽¹³⁾に記されている) 智天使たちも
 またこのことを示しているからです。つまり、二天使は向い合っていたの

です。そして、この二天使は顔をあがないの座に向けて向い合っていた、ということも秘義に事欠いていません。これによって、主が『ヨハネ福音書』の中で⁽¹⁴⁾「唯一の真の神である貴方と、貴方のお遣わしになったイエス・キリストを識ること、これこそが永遠の生命である」と言われたことが、確認されるのです。というのも、我々は、神の本質的在り様やペルソナの在り様を単にそれら自体において贅嘆するのみではなく、キリストのペルソナの一なることにおいて神と人とが最も驚くべき仕方で結合しているということに照し合わせても贅嘆するべきだからです。

5. つまり、もし貴方が、(一方の)智天使として、神の本質的諸属性を観想し、神の〈存在〉は同時に最初にして最後、永遠にして最も現代的、最も単純にして最大のものないし限られないもの、全体としてどこにもありながら、しかも決して包含されないもの、最も現実的でありながら⁽¹⁵⁾決して動かないもの、最も完全なるものにして余分なものも欠けたるものも何も有たないもの、そしてそれにも拘らず無量であり、無辺にして限りがないもの⁽¹⁶⁾、最高度に一なるものながらしかも凡ゆる様式のものとして、一切を自らのうちに、凡ゆる力、凡ゆる真理、凡ゆる善として有している、ということに驚嘆するならば、あがないの座に向い、驚きをもって御覧なさい。あの方のうちには第一の原理が最終の原理と結合しています。つまり神が(神により)第六日目に形づくられた人間と⁽¹⁸⁾、永遠なる者が時満ちて『処女』より生まれた時間的存在者なる人間と、最も単純なる者が最も複合された者と⁽¹⁹⁾、最も現実的能動的なる者が最も苦しみを受け⁽²⁰⁾そして死した人と、最も完全にして無量なる者が小さき者と、最高度に一にして凡ゆる仕方である者が複合され他から区別される個人すなわち人なるイエス・キリストと、結合されているのです。

6. 他方、もし貴方がもう一方の智天使として神的ペルソナの諸固有性を観想し、互いに共通して分ちあえることが固有なることとともにあり、実体を同じくすることが複数であることとともに、相を同じくし得ることがペルソナの個性とともに、共に等しきことが秩序とともに、共に永遠なる

ことが産み出すこととともに、互いに親密であることが送り出すこととともに——なぜなら子は父から、そして聖霊は父と子の両者から送られますが、しかし、送られる者は常に他の二者とともにあり、決して彼らから離れ去ることはないのですから——あることを驚嘆して観るならば、あがないの座に向い、キリストにおいてはペルソナとして一であることが、実体として三であることと⁽²¹⁾ 本性として二であることとともにあることを⁽²²⁾、意志は複数でありながら全き同意があることを、神と人との固有性が別々でありながら、神と人とに共に述語づけを行うということがあることを、貴さの違いがありながら、共に礼拝されるということがあることを、尊さの違いがありながら、共に全てを超えて称揚されるということがあることを、力の違いがありながら、共に統べるということがあることを、驚嘆して御覧になりなさい。

7. ところで、この考察のうちに精神の照明の完成があり、ここで精神は、いわば第六日目のように、神の似像として造られた⁽²³⁾ 人を見るのです。というのは、もし似像が明瞭な類似であるならば、我々の精神が神の子キリスト——彼は本性からして見えざる神の似像なのですから——のうちに我々人間の本性がかくも驚嘆すべき仕方でも高揚され、言い表わしえぬ仕方でも結合されているのを見、また同時に一なるもののうちに最初と最後⁽²⁴⁾、最高と最底⁽²⁵⁾、円周と中心⁽²⁶⁾、アルファとオメガ⁽²⁷⁾、原因から生じたものと原因、創造主と被造物、内にも外にも書かれた本⁽²⁸⁾ を見るならば、既に何らかの完全なるものに到達しているのです。そして神とともに、あたかも第六日目のように、第六段階に至り、神からの諸々の照明の完成に到達しているのです。そして、ここではもう安息の日以外には何も残されていません。この安息の中で、精神は我を忘れ、人間精神の炯眼は、「これまで遂行した一切の業を離れて⁽²⁹⁾」安らぐのです。

註

略 号

- E₁ *The Mind's Road to God*, translated with an introduction by Boas, The Library of Liberal Arts, 32 (New York, Liberal Arts Press, 1953)
- E₂ *Itinerarium mentis in Deum*, with an introduction, translation and commentary by Ph. Boehner, o.f.m., Works of Saint Bonaventure, 2 (New York : Franciscan Institute, St. Bonaventure, 1956)
- E₃ *The Journey of the Mind to God*, translated by Jose de Vink. The Works of Bonaventure, Cardinal Seraphic Doctor and Saint, I (Paterson, New Jersey, St. Anthony Guild Press : 1960)
- E₄ *The Mind's Journey to God : Itinerarium mentis in Deum*, translated from the Latin with an Introduction by L. S. Cunningham, with an essay "Bonaventure vs. Modern Thought" by L. Brophy (Chicago, Franciscan Herald Press, 1979).
- F₁ *Itinéraire de l'esprit vers Dieu, texte de Quaracchi, Introduction, traduction et notes par Henry Duméry, Bibliothèque des textes philosophiques (Paris, Vrin : 1960)*
- F₂ *L'itinéraire de l'âme à Dieu, dans Saint Bonaventure, oeuvres présentées par le R. P. Valentin—M. Breton, Les maîtres de la spiritualité chrétienne (Paris, Aubier : 1943)*
- F₃ *Itinerarium mentis ad Deum, dans Saint Bonaventure par F. Palhoriès (Paris, Librairie Bloud et C^{ie}, 1913).*
- D₁ *Itinerarium mentis in Deum, De reductione artium ad theologiam, Lateinisch—deutsch, Eingeleitet, übersetzt und erlautert von Julian Kaup (München, Kösel—Verlag : 1961)*
- D₂ *Bonaventura, Wanderweg zu Gott : Wanderbuch für den Besinn zu Gott, Am Steuer der Seele, Der Dreistieg oder drei Feuersbrunst der Liebe, Die Übertragung ins Deutsche, Besorgte von Wilhelm Hohn (Freiburg, Otto Water—Verlag : 1955)*
- S *Itinerario de la mente a Dios, en Obras de San Buenaventura, Biblioteca de Autores Cristianos, edicion bilingüe, dirigida, anotada y con introducciones por los pp. Leon Amoros, Bernardo Apperibay y Miguel Oromi (Madrid, B. A. C., Editorial Catorica : 1945-49) tomo primero.*

序

- (1) かかる手法については、E. Cousins が詳細に、体系的に研究し、またその現代思想における意義についても考察している。Ewart H. Cousins, *Bonaventure and the Coincidence of Opposites*, Franciscan Herald Press, Chicago, 1978.

第六章

- (1) 『出エジプト記』25章19節。本著作序文第2・3節(『南山神学』第5号 p.81~82)及び拙註(10) (同 p.86~87) 参照。
- (2) これについては、*Itinerarium mentis in Deum* 第5章で論じられた。(『南山神学』第11号, 1988年2月 p.59~68 参照)。
- (3) ここでネオ・プラトニズムに由来する流出 (emanatio) という語が用いられているが、これによってボナヴェントゥラは三位一体なる神の内部におけるペルソナの発出 (processio) を考えている。そして続く節において、ペルソナの「流出」が、ネオ・プラトニズム的性格 (自然的・必然的) を具えながらも、これとは異なる性格を有するものたることを説明している。つまり、この流出は神の内部で自由に意志的に行われ、流出するものは神的ペルソナであって、流出に従って欠落して行くことではない。
- (4) 観想 (contemplatio) の意味については、*Itinerarium* 序文註(6)と(8)参照(『南山神学』第5号 1982年7月 p.77~92)。
- (5) ボナヴェントゥラは、アンセルムスの『モノロギオン』1~5章及び『プロスロギオン』2~5章の内容をここで要約している。
- (6) 諸存在者の根源として把握された〈善〉は、プラトンによって太陽の比喩を以って説明が試みられたが(『国家』6巻 508 a-509 b), この善を太陽になぞらえる比喩は、ネオ・プラトニズムの伝統の中で好んで用いられている(プロチノス『エネアデス』I, 7, 1:V, 1, 6:V, 3, 12:V, 5, 7等)。とりわけ、偽ディオニュシオスは、善なる神が諸存在の根源であることを太陽が光を溢れ出させ拡散させるのに喩えている。本節の「Nam “bonum dicitur diffusivum sui”; summum igitur bonum summe diffusivum est sui.」という言葉は、偽ディオニュシオスのこうした善なる神に関する著述を要約して表わしている(偽ディオニュシオス『神名論』第1章4, 5節, [PG 3, 592 A-593 D], 第4章1, 4節[693 B-700 C]; 『天上階序論』第1章 [PG 3, 120 D-135 A] 参照)。
- (7) 永遠の始源、産み出す者、息吹く者、愛する者である御父によって永遠に産み出されている御子は、愛される者であるとともに愛する者として、共に愛の息吹き(聖霊)を共有し、聖霊(父と子と共に愛される者)の永遠の始源である。

この文章は非常に訳しづらい。原文は以下の通りである。

Nisi igitur in summo bono aeternaliter esset productio actualis et consubstantialis, et hypostasis aequae nobilis, sicut est producens per modum gene-

rationalis et spirationis — *ita quod sit aeternalis principii aeternaliter comprincipiantis — ita quod esset dilectus et condilectus, genitus et spiratus, hoc est Pater et Filius et Spiritus sanctus; nequaquam esset summum bonum, quia non summe se diffunderet.*

参考までのこの文章の諸訳を記しておこう。

- (E₁) Unless, then, there be eternally in the *highest good* a production which is actual and consubstantial, and an hypostasis as noble as the producer through generation and spiration, so that it would be from the eternal principle eternally co-producing and would be beloved (*dilectus*) in itself and co-loved (*condilectus*), generated, and spirated as are the Father and the Son and the Holy Spirit, in no way would it be the highest good, for it would not diffuse itself most highly.
- (E₂) Unless there were in the highest good from all eternity an active and consubstantial production, and a hypostasis of equal nobility, such as is found in producing by way of generation and spiration — and this in such a way that what is of the eternal principle is also eternally of the co-principle — so that there is the loved and the beloved, the generated and the spirated, that is, the Father, and the Son, and the Holy Ghost, that is to say, unless these were present, there would not be found the highest good here, because it would not be supremely self-diffusive.
- (E₃) Thus, in the supreme good, there must be from all eternity an actual and consubstantial producing, the producing of a hypostasis as noble as the One who produces by way of both generation and spiration. So, there is produced an Eternal Principle, who is an eternal Co-producer. And thus, there is the producing of one Beloved and one Co-beloved, of one Engendered and one Spirated. So, in all, there are the Father, the Son, and the Holy Spirit. Otherwise, this good would not be supreme, since it would not be supremely self-diffusive.
- (E₄) In the highest good there must be an eternally actual and consubstantial production and a hypostasis equally noble who produces by way of generation and spiration. There must be an eternal principle who is an eternal producer. Thus there would be a Beloved and a Co-Beloved, One generated and One spirated: Father, Son, and Holy Spirit. If this were not so it would be the highest good since it would not totally diffuse itself.
- (F₁) Si donc le souverain bien ne renfermait éternellement une production actuelle et consubstantielle d'hypostases égales en dignité au principe d'où

- elles procèdent par voie de génération et de spiration — principe éternel qui coengendre éternellement ses égaux —, s'il n'y avait en Dieu un Bien-Aimé et un co-Bien-Aimé, l'un engendré et l'autre spiré, c'est-à-dire le Père, le Fils et le saint Esprit, Dieu ne serait pas le souverain bien, puisqu'il ne s'épancherait pas tout entier.
- (F₂) Si donc, il n'y avait pas éternellement, dans le souverain Bien, une production *actuelle* et consubstantielle, *hypostatique* et égale au principe d'où elle procède par voie de génération et de spiration ; si cette production ne venait pas d'un principe éternel produisant éternellement son égal ; si l'amour mutuel n'existait pas ; s'il n'y avait pas une personne engendrée et une personne procédant, de telle sorte que nous ayons : Père, Fils et Saint-Esprit, il ne serait pas le souverain Bien, puisqu'il ne s'épancherait pas d'une manière souveraine.
- (F₃) Si, dans le bien suprême, il n'y avait pas éternellement une production actuelle et consubstantielle, une production de personne égale en dignité au principe d'où elle sort par voie de génération et d'amour, principe éternel qui coengendre éternellement, de telle sorte que la procession s'opère en vertu d'un amour réciproque par voie de génération et de spiration et distingue ainsi les trois personnes, Père, Fils et Saint-Esprit, si cette production divine, dis-je, n'avait lieu, le bien suprême ne serait pas, parce qu'il ne se communiquerait que d'une manière imparfaite,...
- (D₁) Wenn also in dem höchsten Gut nicht von Ewigkeit her ein wirklicher und wesensgleicher Hervorgang statthätte und es nicht durch Zeugung und Hauchung eine dem Hervorbringenden gleicherhabene Hypostase gäbe — ein ewiges Mitprinzip des ewigen Prinzips —, also einen Geliebten und Mitgeliebten, einen Gezeugten und Gehauchten, nämlich Vater, Sohn und Hl. Geist, dann wäre nicht das höchste Gut, weil es sich nicht auf die höchste Weise mittheilte.
- (D₂) Wenn also nicht in dem höchsten Guten von Ewigkeit her eine wirkliche und wesensgleiche Hervorbringung wäre und eine Personhaftigkeit, gleich adelig dem Hervorbringer auf dem Wege der Zeugung und Hauchung — so daß sie von der ewigen Urheit herkommt, die von Ewigkeit her Miturheit hat — so daß ein Geliebter und Mitgeliebter wäre, ein Erzeugter und ein Gehauchter, das ist der Vater und der Sohn und der Heilige Geist, so wäre es keineswegs das höchste Gute, weil es nicht in höchstem Maße sich mittheilte.
- (S) Por lo tanto, de no existir una producción actual y consubstancial, con duración eterna, en el sumo bien y además una persona tan noble como la

persona que la produce a modo de generación y de espiración — modo que es del principio eterno que eternamente están principiando sus términos principados, de suerte que haya un amado y un coamado, un engendrado y un espirado, a saber: el Padre, y el Hijo, y el Espíritu Santo —, nunca existiera el sumo bien, pues que entonces no se difundiría sumamente.

- (8) 神の善性の量りえないこと(immensitas)が、中心的(centralis)、点的(punctalis)という言葉に対比され、拡大無辺の空間に普く及んでいくという空間的イメージが喚起されている。
- (9) tueri (to look upon, to watch, など)の強意形である con-tueri が用いられている。
- (10) videre (to see)が用いられている。
- (11) 六つの在り様とは、最高度の自己伝達力、最高度の実体的同一性、最高度の類似性、最高度の同等性、最高度の同永遠性、最高度の同親密性である。
- (12) ギリシャ語の *ὑπόστασις* は「基に置かれたもの」の意からして、ボナヴェントゥラは、個体を表わす *suppositum* や *individuum* の同義語として、特に理性的本性をもつ個体を表わす *persona* の同義語として用いている。
“in unica sui acceptione tam nomen individui quam nomen suppositi aequipollet hypostasi”. III *Sent.* d.10, a.1, q.3 *Resp.* (III 231a).
“esse personam, et esse hypostasim, esse suppositum, esse individuum, secundum quod vocabulo hypostasis aequipollent”. *Ibid.* (231b).
“Persona dicitur rationalis naturae suppositum proprietate distinctum”. I *Sent.*, d.25, a.1, q.1 *Resp.*(I 436b).
- (13) 25章20節。
- (14) 17章3節。
- (15) 現実的(actualis)であることのうちには働き・活動(actio, operatio)が含意されている。しかし、この最も現実的な働き・活動は、運動を含んでいない。
- (16) et tamen immensum et sine termino infinitum.
- (17) 「反対なるもの的一致」(coincidentia oppositorum)というボナヴェントゥラが好んで用いる手法でイエス・キリストにおける神人結合の神秘を表現しようとしている。
- (18) 『創世記』1章26節。
- (19) 人間は、物的本性と霊的本性の両方から複合されたものであり、被造界の全ての本性を集約している小宇宙と做されている。第二章(『南山神学』第8号1985年p.40以下)参照。
- (20) actualissimum cum summe passo と、受難が actio-passio (能動-受動)の対比的図式で表現されている。

- (21) 第一章第三節に、「キリストにおける三重の実体、すなわち物（肉）体的・靈的・神の実体を云々」とある。「南山神学」第7号（1984年）113頁参照。
- (22) 神的本性と人間本性と。
- (23) 『創世記』1章26節。
- (24) Cf. “Quid sapientius et congruentius quam quod ad perfectionem totius universi fieret coniunctio primi et ultimi, Verbi scilicet Dei, quod est omnium principium, et humanae naturae, quae fuit ultima omnium creaturarum?” *Brevil.*, P.4, c.1, §2 [V 241a] ; “sic secundus homo, totius mundi reparati complementum, in quo primum principium coniungitur cum ultimo, scilicet ‘Deus cum limo’ . . .” *Ibid.*, c.4, §4 [V 244b-245a] .
- (25) Cf. “Quid benevolentius, quam quod Dominus propter servi salutem accipiat formam servi?” *Ibid.*, c.1, §2 [V 241a] .
- (26) 第5章8節（『南山神学』第11号，1988，66頁参照）。
- (27) 『ヨハネ黙示録』1章8節，5章1節。
- (28) 『エゼキエル書』2章9-10節及びこれを承けた『ヨハネ黙示録』5章1節（なお『イザヤ書』29章11節及び『ダニエル書』12章4節，9節）などに由来する本の比喻によって啓示を表わす伝統（直接にはサン・ヴィクトル学派）をひいてボナヴェントゥラは度々本のイメージを用いている。（G.A. Zinn, *Book and Word. The Victorine Background of Bonaventure's Use of Symbols. S. Bonaventura 1274-1974.*, t.II, 1973, p.143-169 参照）。
- Cf. “ad perfectionem universitatis debuit fieri creatura, quae hoc sensu duplici esset praedita ad cognitionem *libri scripti intus et foris*, id est Sapientiae et sui operis. Et quia in Christo simul concurrunt aeterna Sapientia et eius opus in una persona; ideo dicitur *liber scriptus intus et foris* ad reparationem mundi”. *Brevil.*, P.2, c.11, §2 [V 229a] ; 同じく *Ibid.*, c.12 §1 [V 230a] ; *In Hexaëm.*, coll.12 [V 384 a -387b] 参照。
- (29) 『創世記』2章2節。

The Soul's Journey to God (5)
A translation with notes and commentary
of St. Bonaventure's
Itinerarium mentis in Deum,
Chapter 5

Hisako NAGAKURA

After having contemplated God through and in the sensible world, which he considers a vestige of God (chapters 1 and 2), and then through and in the human mind, which he considers an image of God (chapters 3 and 4), Bonaventure tried to contemplate the divine unity by analysing God's first name as revealed to Moses, "I am Who I am" (Chapter 5). (Our translation and commentary on the first five chapters are found in Numbers 5, 7, 8, 9 and 11 of *Nansan Shingaku*).

In this sixth chapter Bonaventure tries to speculate on the title "Good" as applied to God in St. Luke 18: 19, where it is written, "no man is good save God Himself." Here in this chapter we see the influence of Pseudo-Dionysius and St. Anselm on Bonaventure's thought and method of expression. Besides his predilection to use triads and triplets, which he considers as reflections of the divine Trinity, we also find a preference for paradoxical couplets, which he uses abundantly as a means to express the incomprehensibility of the mystery of the Trinity and that of the incarnated Word. The abundance of couplets is not always paradoxical but usually flows in smooth rhythms of speech which renders this chapter rhetorical and eloquent.